延吉に尹東柱の生家などなどを、訪ねて

（『むくげ通信』242 号（2010.9.26）23～27 頁　飛田雄一

今夏、神戸･南京をむすぶ会のフィールドワークで延吉を訪問した。むくげの会では飛田と大和君が参加した。飛田は、1987 年にむくげの会が大村益夫訳『延辺朝鮮族自治州概況』を出版したときに、むくげ出版の社長？として招待されて訪問して以来、久々の訪問だ。（『通信』109、110 号参照）

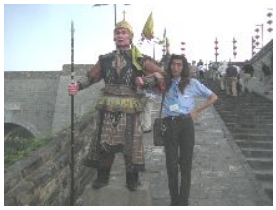
神戸･南京をむすぶ会は、1996 年の「丸木位里・俊とニューヨークの中国人画家たちが描いた南京１９３７絵画展」開催時のボランティアが、一度は南京を訪問しようと作られた会で、まさかその後、毎年、計 14 回も南京を訪問することになるとは考えてもみなかった。毎回、南京訪問ともう 1 カ所、日本軍が侵略した地を訪ねることにしている。第 1 回の 97 年には淮南（パールバック『大地』の舞台）、98 年、撫順、99 年、太原・大同・北京、2000 年、ハルビン、01 年、蘇州・杭州、02 年、重慶、03 年は SARS の関係で訪中できなかったが、04 年、大連、旅順、05 年、済南・青島、06 年、無錫・石家荘・天津、07 年には 8 月に南京・武漢、さらに 12 月には記念館リニューアルオープン時に南京、08 年は、瀋陽・長春、そして昨年（09 年）は牡丹江、虎頭、虎林を訪問した。現地を実際訪問して、現地でしか学べないような体験をすることができた。

今夏の第 14 回目の訪問は、延吉になった。延吉は延辺朝鮮族自治州の首都で、抗日運動の拠点のひとつでもあった。また、尹東柱の生まれ育った明東村なども知られている。以下、延辺を中心にレポートする。

●

8 月 13 日、関空から南京への直行便（週 2 回）で南京に入った。今夏の参加者は 22 名、内格安で招待した大学生が 4 名だ。最初に個人経営の「南京民間抗日戦争博物館」を訪ねた。事業に成功された個人が自社ビルの一角に作られているものだ。そして、中華門。それは、東京山の手線ぐらいの大きさの南京城壁の南に位置する。門というよりそれ自体が「城」だ。

中華門の映画セットと大和君



14 日（2 日目）、南京大虐殺の現場を訪ねるフィールドワークの日だ。午前中、燕子磯、草鞋峡、中山埠頭、挹江門を訪ねた。いずれも長江（揚子江）沿いの集団虐殺の現場で、記念碑が建てられている。午後には、「ラーベ日記」でよく知られているラーベ旧家、大虐殺当時「国際安全区」が設置された南京師範大学を訪問した。同大学には当時中国人保護のためにをまさに身を挺して闘ったミニボートリン像がある。

燕子磯の記念碑前で

●

15 日（3 日目）は、毎年この日に記念館で日中合同の追悼集会を開くが、この行事が訪中の第 1 の目的である。記念館は 2007 年に旧館の約 3 倍にリニューアルオープンしている。今夏、日本は猛暑だったが、南京もまさに猛暑。中国では気温が 40℃を越えると会社が休みで何らかの助成金がでるとか。そのため？？発表では 38℃あるいは 39℃になっているのだ、と南京市民の間で噂が広まってい

るようだ。いったい本当は何度なのか分からないぐらい暑かった。またこの日から同記念館で中国人強制連行展が開かれるので、その開会式も続いて開かれた。その後、大虐殺幸存者（中国ではこのように呼ぶ）の証言集会が開かれた。証言してくださった張國棟さんは 82 歳。事件で親族が殺されたその体験を語ってくださった。

ラーベ像、長嶋さんに似ている？

8.15 集会であいさつする宮内陽子団長

午後は、記念館を観覧した。広い館内を今年はゆっくりと観覧することができた。夜は、夕食後、恒例となっている南京一の繁華街「夫子廟」にでかけた。いつ行ってもとても賑やかだ。

16 日（4 日目）、午前中に東郊叢葬地、太平門の記念碑、宋美麗別荘を訪ねたのち、南京をあとにして上海までバスで約 4 時間、そして上海虹橋空港から飛行機で延吉に向かった。煙台経由の飛行機は 1 時間遅れで夜中 1 時前に延吉に到着した。広い中国には飛行機網が発達しているが、経由便が多く、時間が押せ押せとなって遅延が多いそうだ。中国人は 1 時間の遅れなんて気に介していないようだった。

●

そして 17 日（5 日目）、延辺朝鮮族自治州の旅が始まった。メンバーの年齢は 10 代から 80 代、体調を崩すものでででている。若者は体調を崩すのも早いが回復も早い傾向があるようだ。加齢にともない、体調を崩すにも回復するにも時間を要するようになるとのことだ。

安重根義士故居

8 時 40 分、バスでホテルを出発してロシア、朝鮮民主主義人民共和国、中国の三角地帯の防川（ぼうせん）に向かう。途中、揮春市街を抜けるが、それ以外に大きな町はなく、大草原をバスは走っていく。途中、立ち寄る時間はなかったが安重根故居の横をとおり、安重根がここにいたこともあるのかと、思いをめぐらす。

到着した防川には、軍事用の展望台と一般用のそれがある。私たちはもちろん一般用だ。あと 15 キロで海だが、この三角地帯では中国は海に接していない。その海、日本では日本海、韓国では東海。中国でも日本海か、その掲示には日本海を東海とする書き込みもあった。望遠鏡を使わなくても、北朝鮮、ロシアがよく見える。よくぞここまでやってきた、と感無量であった。

北朝鮮をバックに筆者

ロシアと北朝鮮を結ぶ鉄橋

影は越境している

トラックが中国にやってきました

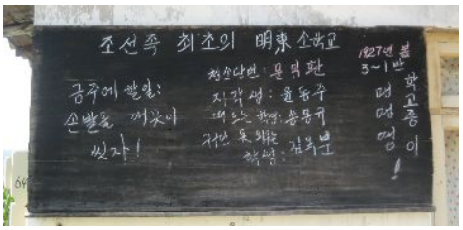
帰路、中国と北朝鮮との国境の町として有名な図們を訪問した。橋の真ん中に国境線が引かれている。ものものしい雰囲気はなく、監視人も軍服ではなく一般人の服装をしていた。朝鮮側に監視人の姿は見えない。仕事で往来する人がいるようで、数人の女性が普通の通勤府警のように朝鮮側から帰ってきていた。橋の上のまさに国境の線を 1 歩またいだらどうなるのだろうかと思ってみたりしたが、眺めるだけで引き返した。中国側の展望台に登ると、更に朝鮮側がよく見えた。お土産店には北朝鮮の金日成バッチや切手、お金などが並んでいた。私は、等高線のはっきりした朝鮮半島の骨格が一目瞭然の地図を買ってきた。最近ますますサイクリングに凝っている私は、このような地図が大好きなのである。外で夕食をすませてホテルには 7 時半ごろに帰ってきた。丸一日のバス旅行であった。この日も延吉の同じホテルに宿泊した。

延吉の朝市です。今回食べませんでした

金虎雄さん

18 日（6 日目）は、尹東柱のフィールドワークだ。朝、延辺大学の金虎雄さんから「延辺地方の抗日運動と尹東柱」をテーマに講演をしていただいた。金さんは、延辺大学教授で同大学朝鮮韓国研究センター主任でもある。体系的なとてもステキな講義だった。講義後、バスに乗り込み尹東柱が生まれ育った明東村に向かった。生家は復元されており、近くには明東歴史展示館もあった。尹東柱の卒業した明東小学校は現在は畑になっているが、その隣の敷地では校舎の復元工事が行われていた。

尹東柱生家



「掃除当番・文益煥」、ジョークです

明東学校遺跡地

尹東柱の墓地も訪問したかったので現地旅行社にその旨を伝えていたが、中国的ケンチャナ精神？のために、実現できなかった。私たちの大型バスではその山の入口で降りなければならす、30 分の登山ということで諦めた。残念だ。

その後、長白山に向かった。今回のコースについて、最大 7 泊 8 日を前提にいろいろ研究したが、メンバーのひとりが長白山に飛行場ができていることを突き止めた（少々オーバー）。長白山は中国名で、朝鮮では白頭山と呼ぶ。同じ山だ。この山は朝鮮人の始祖の地であると同時に満州族の始祖の山でもある。

当初、延吉に 3 泊して最後の日に延吉から白頭山を往復することを考えていたが、この長白山空港利用によって、スケジュールに若干の余裕がでた。長白山に泊り、翌日、余裕をもって長白山の登山と散策ができることになるのだ。

長白山の麓、吉林省安図県二道白川鎮のホテルがこの日も目的地だったが、水害のためこの地方は大きな被害を受けていた。この水害では松花江流域は特に被害を受け、大きく道がえぐられているところもあった。夜、9時過ぎになってホテル・虎林大厦に到着した。

ここで専用バスに乗り換えです

●

19日（7日目）、朝5時半起床、6時半出発だ。私たちの乗ってきたバスで長白山の入口へ。ここで、入場券を買って別の専用バスで、中腹まで進む。そこで更に4輪駆動のワゴンに乗りかえて山頂に向かうのである。山麓は好天だったのに山頂に近付くにつれて雲が多くなり、山頂直下では視界数メートル。が、気を取り直してしばらくの登山。そしてその山頂から天地を望むが、何も見えない。残念至極。看板の前で記念写真をするのがせいぜいだった。以前、天地をみたことのある私は、解説を試みようとするがブーイングと風の音にかき消された。猛暑の南京、涼しい延吉、寒い長白山であった。

この石碑は見えました

ふたたび4輪駆動のワゴンに乗って下山すると、青空が見える。山頂付近は、雲がかかっているので、仕方がないかと、長白瀑布への遊歩道を歩く。水も木々も花々も瀑布も、みんなきれいだった。天地は、北の松花江、東の豆満江、西の鴨緑江の源であるが、松花江、鴨緑江は、地下水脈を流れて、唯一豆満江に長白瀑布から直接流れでているのである。水量も充分、雄大で堪能した。

長白瀑布です

瀑布散策のあと、もうひとつ「緑淵潭」を散策した。深い木々の間にその緑色に染まった池がある。すてきなところで、もう帰りたくない雰囲気だ。

でも、長白山をあとにして長白山空港に向けて出発した。新しい空港で、便数も超少なく、スーパー1軒以外には何もない。夕食用のお粥、ザーサイの缶詰などを買って北京行きの飛行機に乗り込んだ。6時発、8時半北京着の飛行機だった。北京では、定宿の建国飯店に宿泊した。

●

いよいよ最終日の20日（8日目）、6時には起きて朝食、7時40分出発、北京空港に向かう。北京観光の時間がないが仕方がない。飛行機は、青島経由の関空行だ。青島までは中国国内便で、青島で出国手続をすることになる。青島空港で乗客は、一旦完全に外に出され、再び一般乗客と同じように出国手続をスタートするのである。乗る飛行機は同じなので、いやだいやだの声多々あるも、仕方がない。途中で迷子になった中国人親子を係員捜索・発見後、飛行機は2時間？遅れで、青島空港を出発した。そして、関空にもどったのである。めでたし、めでたし・・。

さて、14回と会を重ねた南京ツアー、来年は南京ののちどこへ行こうかとすでに空港ロビーで機内でと話が弾んだ。大勢は海南島に収斂されつつある。そして、はや私は海南島の勉強を始めているのである。